

ミキモト真珠島（三重県鳥羽市）

—養殖真珠誕生の地での産業観光—

社団法人中部開発センター

企画事業部 折戸 厚子

新しい観光のあり方“産業観光”が、中部圏において積極的に進められています。“産業観光”は、産業の内容を対象とする観光で、生活の中の商品・サービスが提供されるまでに、どのような歴史や技術があるのかを発見し、体験する知的好奇心にあふれた観光です。

具体的には、製造業の工場見学や、伝統産業の体験プログラム、企業博物館などがあげられます。こうした施設を訪ねる機会は、従来から社会見学や企業視察などがありましたが、特定の団体や目的に限らず、個人客や家族客などの一般観光客でも楽しめるよう門戸を広く開放していこうとするところに“産業観光”の特徴があります。

今回は、1951年にオープンし、産業観光の先駆的施設と言われる三重県鳥羽市の「ミキモト真珠島」を紹介します。



橋（パールブリッジ）で渡ることができるミキモト真珠島

真珠養殖の発祥の地

今日、私たちが目にする真珠のほとんどは養殖真珠です。しかし、ほんの100年ほど前までは、真珠は貝の中に偶然できた天然真珠しか存在せず、1万個の貝を割っても、わずか数個現れるかという稀少価値ゆえに、一部の特権階級しか持つことのできない非常に高価な宝石でした。

そんな真珠の産地、三重県に生まれた御木本幸吉は、西洋化が進む明治初期の東京で、故郷の天

然真珠が高値で取引されているのを見聞きし、真珠という商品の可能性に目を向けます。乱獲されて減少していた真珠の母貝であるアコヤ貝の保護と増殖に乗りだし、やがて、自然の偶然に頼らず、人為的に真珠を生み出せないかと、真珠の養殖に挑戦することとなります。

前人未踏の真珠養殖の道のは苦難の連続でした。中でも、全財産を注ぎこんで養殖していたアコヤ貝が、主な養殖場であった志摩・英虞湾の赤潮で、ほとんど全滅してしまったことは、大きな

打撃となります。

しかし、禍福はあざなえる縄の如し、翌年、鳥羽の相島（おじま）でもわずかながらに養殖していたアコヤ貝から、5粒の半円真珠が見つかり、養殖真珠を作り出すことに成功したのです。この養殖真珠誕生の舞台となった相島が現在の「ミキモト真珠島」（鳥羽市・株式会社御木本真珠島）です。

伊勢志摩国立公園と真珠ヶ島

その後、10年以上もの長い年月をかけて真円真珠の養殖、真珠の量産に成功した幸吉は、「真珠王」として世界に知られるようになります。

昭和初期、彼のもとに頻繁に訪れる国内外の要人、ジャーナリスト達を迎えるために、養殖真珠発祥の地である相島を「真珠ヶ島」と名付け、見学施設としました。そこでは真珠参考館やミニ養殖場を設けて、真珠の魅力を伝えるとともに、伊勢志摩の美しい自然や景観を紹介する事にも熱心でした。

故郷の風景を愛する幸吉は、伊勢志摩の景勝を保護しようと、国立公園設置を目指して地元の有力者と共に国へ陳情しています。鉄道の延長や道路整備などにも尽力し、その熱意や努力によって戦後第一号として伊勢志摩国立公園ができました。

1951年には、有限会社御木本真珠ヶ島を設立し、島全体を真珠をテーマとした観光施設に整備、入場料30円で一般公開を開始しました。

現在は、ミキモト真珠島（しんじゅしま）に改名され、日本有数の観光地となった伊勢志摩に、「真珠のふるさと」という華やかな魅力を加えています。

真珠をあらゆる角度から紹介する 真珠博物館

真珠島の中心となるのは、真珠をあらゆる角度、
- 科学、歴史、美術、工芸等から紹介する真珠博

物館です。

1階の「真珠のできる仕組み」のコーナーでは、どのように真珠貝が真珠をつくるのかが、貝の標本やパネル、映像等で紹介されます。

世界には、十万種以上の貝類が存在しますが、美しい真珠をつくるには、貝殻の内側が美しい真珠光沢を持っている貝でなくてははいけません。真珠養殖に使われる貝は、アコヤ貝をはじめ主に6種類。いずれも外側は地味で目立たない色をしていますが、内側は美しい真珠光沢を持っています。

貝の中で真珠ができる仕組みは、貝の「外套膜」という貝殻を作る部分が、砂粒や虫などの異物が入った拍子に、貝の柔らかい部分に入り、異物を核に、体の内側で貝殻を作るように真珠層を形成していくというものです。天然真珠は、これが偶然、貝の中で起こったもので、めったに見つからず、大きさや形が整っていることはさらに稀です。

養殖真珠は、外套膜の切片と淡水産二枚貝を加工した核を貝の中に移植して、約二年間育てます。その間には養殖段階に応じ漁場を変え、また赤潮や台風が発生すれば影響の及ばぬ海域に移動させ、夏場はほぼ毎日、貝の表面に付着する汚れや生物を取り除く作業を行うなど、常に貝の健康や海の環境に気を配り続けなければなりません。

養殖の途中で死んでしまう貝が半分、真珠が取り出せても良質なものは約3割、なかでも「花珠」と呼ばれる最高品質の真珠は、核入れ手術をした貝の中の5%しか取れないなど、現在でも決して安価ではない真珠の価格の理由の一端がつまびらかにされます。

次の「真珠の生産と流通」のコーナーでは、真珠貝から取り出された真珠が、大きさや色目、品質によって選別されて、ネックレスとして完成するまでの一連の流れを、実物の真珠を見ながら、学んでいきます。

玉石混淆の集まりから、色別、大きさ別に並んでいく真珠は美しく、また孔あけの道具などを用いた作業や、養殖真珠産業が日本で盛んになったため、真珠の重さを量る単位には、今でも、日本古来の匁（もんめ）（1匁=3.75g）が、世界的

に使われているなど、真珠にまつわる興味深い事実も紹介されています。

華やかなジュエリーコレクション

2階では、「天然真珠の時代」「養殖真珠の時代」に分かれて、それぞれの時代の真珠を用いたジュエリー、美術工芸品を見ることができます。

「天然真珠の時代」は、紀元前後から20世紀初めまでのアンティークジュエリーのコレクションです。古代ローマ時代から始まり、ルネッサンス、ヴィクトリアン、アールヌーヴォーなど、世界各地、各時代で、真珠が古くから宝石として珍重されてきたことがわかります。

また、「養殖真珠の時代」は、養殖真珠の誕生以降、日本古来の伝統技法と、欧米の宝飾製作デザインとが融合して、ミキモトのジュエリーが創

出されていく様が見てとれます。

万博を重視した幸吉は、真珠を用いた美術工芸品を数多く出品しており、約1万個以上の真珠をふんだんに用いて作られた「御木本五重塔」「自由の鐘」などが今でも残されています。

また、37年のパリ万博に出品した帯留「矢車」は、部品の組み立てかたによって、ブローチ、髪飾り、指輪など12種類のジュエリーとして用いることができる日本の装身具技術の粋を集めて作られた逸品ですが、万博終了後に販売され、長く行方不明になり、幻の傑作とされていました。それが1989年、ニューヨークのオークションに登場。半世紀を経て、日本に帰国し、現在は真珠博物館に展示されています。



美しい光沢を持つ真珠貝



12種類のデザインとともに展示される「矢車」



勺を単位とした真珠用の秤。ちなみに5円玉の重さは1g



太平洋戦争前に平和への願いを込めて、万博に出品された真珠でできた「自由の鐘」

御木本幸吉記念館

養殖真珠の生みの親、御木本幸吉の業績が紹介された御木本幸吉記念館は、生家である江戸末期のうどん屋「阿波幸」の再現から始まります。文明開化の明治に東京を見聞し、真珠と出会ったこと、世間からは無謀と思われた真珠養殖への挑戦、それを支えた妻うめの死、エジソンとの対面やその直筆の手紙、「真珠王」と呼ばれながらも質実な生活を貫いた晩年など、江戸、明治、大正、昭和とそれぞれの時代背景を交えて、96年の生涯が紹介されています。

展示のアクセントになっているのは、折々の幸吉の当意即妙でユーモアあふれる言動で、明治天皇に拝謁した際の「世界中の女性の首を真珠でしめてごらんにいれます」との決意表明。「真珠は月のしずくという伝説がありますね」と真珠の美しさをたたえたアメリカ大統領夫人に「いいえ、私のつくる真珠は人の涙の結晶です」と答えたエピソードなど、けっして容易ではなかった人生と、それでも常に闊達であった幸吉の人柄をしのばせます。

海女による素潜りの実演や真珠のショッピング

かつて真珠の養殖になくはならない存在だった海女の活躍を記念して、開島以来60年近く、海女の素潜りの実演が続いています。伊勢志摩には現在も海女が漁を行っています、たいていはウ



阿波幸から始まる御木本幸吉記念館

エットスーツを着用しているため、昔ながらの白い磯着の海女が見られるのは真珠島だけになっています。

また、博物館に隣接したパールプラザは、ミキモトブランドや真珠島のオリジナルの真珠を中心としたアクセサリーが並び、ショッピングも真珠島を訪れる楽しみになっています。中には3,500万円以上もする大粒の真珠など、商品といえども訪問者にとっての見所の一つと言えるかもしれません。

2階は幸吉の生家にちなんで「阿波幸」と名づけられたレストランがあり、伊勢うどんや、アコヤ貝の貝柱など、幸吉や真珠にちなんだメニューが用意されています。



約60年続く海女の素潜り実演



真珠島で最高価格のシロチョウガイ真珠

施設の概要

住 所 三重県鳥羽市鳥羽1-7-1
電話番号 0599-25-2028
営業時間 午前8時30分～午後5時30分
(季節によって変動あり)
休業日 12月第2火曜日より3日間
入館料 大人1,500円、小中学生750円
(団体割引あり)

URL

<http://www.mikimoto-pearl-museum.co.jp/>

アクセス JR・近鉄 鳥羽駅下車 徒歩5分

インタビュー



ミキモト真珠島
経営企画室 係長 松崎 功氏

—「産業観光の先駆け」とも言われるミキモト真珠島の事業開始の経緯についてお聞かせください。

もともとは観光施設としてオープンしたわけではありません。昭和の初め頃、国内外の要人やジャーナリストが、幸吉のところを頻繁に訪れていました。その頃、幸吉は、ここ鳥羽より30kmほど南に下った志摩市にある養殖場で過ごしていたのですが、交通の便も悪く行きづらかったため、不便をかけてはいけないと、養殖真珠が生まれたこの島を真珠ヶ島と名付け、見学施設として整備して、お客さんを迎えました。1929年のことです。

戦中は途絶えていたのですが、戦後、進駐軍の間で真珠が日本の土産として評判になるなどして、再び多くの人を訪れるようになりました。その噂というか、反響が人づてに広まり、一般にも見せてもらえないかという要望が、特に子供達に見せたいという学校関係者などから寄せられ、それなら、ぜひ見ていただこうと一般向けにスタートしたのが1951年3月です。

当時は、女工が並んで、核入れ手術をお見せしたり、ネックレスをつくる過程をお見せしたりする、モデル工場的な見学施設でした。幸吉の自分のつくりあげた養殖真珠を広く人々に知ってもらいたい、また、真珠島を拠点にたくさんの人に来てもらい、地域の経済に貢献したいという思いを

重要視して整備された島です。

—なぜ、養殖真珠を知ってもらう必要があったのでしょうか？

養殖真珠ができるまで、真珠はすべて天然のもので、ほんの小さな粒が、目が飛び出るくらいの金額でやりとりされていました。

しかし養殖真珠の誕生により、より多くの女性に美しい輝きを持つ真珠を届けることができるようになったのです。

そして、日本を代表する産業にまで発展した真珠養殖のすべてを世間に広く知ってもらいたかったという動機があると思います。

また、日本資本主義の父、民間外交の先駆者として名高い渋沢栄一と親交があり、「君が発明した養殖真珠を日本の武器にして民間外交をやってみてはどうか」というアドバイスがあったことも大きな要因でした。

—宝飾品を製造・販売する(株)ミキモトとはどのような関係なのでしょう？

同じミキモトグループの中でも、(株)ミキモトとは別会社になります。

私どもは観光サービス業を主にした事業を独立採算で行っております。

もちろん島内の施設にはショップもあり、そこでミキモトブランドのジュエリーやここミキモト真珠島のオリジナル商品も販売しております。

—真珠島の経費は、入場料やお土産の販売などでまかなえるのでしょうか？また、その割合はどうなっていますか？

なんとか独立採算でやれています。ジュエリーの販売など物販のほうが、若干、ウエイトが大きくなっています。

やはり、養殖真珠発祥の地、真珠の本場である鳥羽で真珠を買いたいという、商品にプラスした付加価値を認めてお買い求めになる方がたくさんいるということで、大変ありがたいことだと思っています。



ミキモト製品と、ミキモト真珠島オリジナル製品を販売するショップ

—施設の特徴や、見どころについてお聞かせください。

養殖真珠が生まれた世界に一つしかない場所というところが特徴になります。

真珠はかなり一般的な宝石になりましたが、どうやって作るのかなど、まだまだ知られていない部分もあります。1985年にオープンした真珠博物館は真珠島の中でも特に見ていただきたい施設です。真珠のできる仕組み、真珠養殖の実際などの解説に加えて、開館以来、真珠のジュエリーの収集を行っていて、非常に貴重なコレクションが揃っています。

一般的には、真珠博物館を見た後に、海女の実演をご覧いただき、ショッピング・食事を楽しんで、御木本幸吉記念館へと回るコースで、所要時間1時間半から2時間の場合が多いようです。

全てをゆっくりご覧いただきたいのですが、ご旅行の日程の都合もあると思いますので、お急ぎの場合なら、博物館と海女の実演はぜひともご覧いただきたいと思います。

—なぜ、真珠島で、海女の実演が行われているのでしょうか？

海女との関わりは真珠養殖の実験を始めたころに遡ります。

今では、貝は人工授精で培養し、籠に入れて、筏につるして養殖していますが、そうした方法が確立されていなかった時代は、海で自然に生きて

いる貝を拾い集めてきては、核を入れた貝を海に戻して、海の底に石で垣を作り、その中で育てていました。そうした貝のメンテナンスと収集には、この辺りで働いていた海女の協力が必要でした。言いかえれば、海女がいなければ、貝も集められないし、管理もできないので、養殖真珠ができたかどうか分かりません。

大正の終わりから昭和初めに、籠や筏が発明されて、どんどん海女の力を借りなくてもよくなったようです。しかし、幸吉は、必要ないからといって雇用を打ち切らず、それ以外の陸での仕事をしてもらっていました。また、それとは別に、海女に助けていただいたことをいつまでも忘れないように、伊勢志摩の海女の存在を広く知ってもらおうと実演を始めました。

現在でも、12名ほどの海女を雇用しており、実演の他に、入り口でお客様をお迎えしたり、幸吉の銅像の前でお客様と写真をとったりといったもてなしの大きな役割を担ってもらっています。

一海女はどのように採用されているのですか？普通の海女との違いはありますか？

10年ほど前までは、地元の海女の多い環境で育った女性が、自分も真珠島でやろうかなと入ってくるが多かったのですが、最近では、海女の人数は減り、本職の海女のなり手も少なくなっています。昨年、今年と、テレビで海女の紹介を見て、まったく海女とは関わりのない世界から、海女になりたいと飛び込んできた女性の採用が続いています。今後は、そういう海女が増えていくのかなという気がします。「海女になりたい」という一心で、この世界に入ってくるため、上達も早いし、お客様と接するのも好きなようで、評判も良いです。

最近の若い方は、プールで泳いだことはあっても、海で泳いだことがないという人が多いので、まず、海の状況に慣れることから始め、徐々に深場いき、一月くらいかけて練習します。それから、デビューとあって、簡単なセレモニーをしつつ、お客様に初披露をします。

漁をしている海女は多くの獲物を採ることが一番大切ですが、真珠島の海女はお客様にお見せる目的もありますので、足を揃えるなど潜る姿の美しさも重要になります。それから、潜りっぱなしでは、お客様がつまらないので、もぐってはあがって貝を見せるを繰り返す体力的な養成をしなければいけません。

一どういったお客様がいらっしゃるのでしょうか？

年間、25～26万人いらっしゃいます。中高年の女性グループの割合が高く、滞在時間も長いようです。近年になって、目立つのは団塊の世代のご夫婦で、新婚時代に訪れた土地にもう一度とか、当時は新婚旅行に行けなかったから、改めて、伊勢志摩に来たというお客様が増えてきました。

海外からの観光客は、例年は1割強ですが、徐々に増えてきて、昨年は約3万人が海外からの観光客でした。

一海外からの観光客が増えているのはなぜでしょうか？

10年ほど前、国内需要だけを見込んでいては頭打ちになる、開拓余地が大きい海外、特にアジアからお客様を積極的に呼ぼうと、海外に直接、赴いて誘致活動を行うようにしました。現在は、韓国、台湾、香港、中国本土などで営業を行っています。台湾は10年前に比べて4倍、韓国・香港は8倍、中国本土は2倍強に増えています。



足を揃えて潜る海女の実演

ヨーロッパ、アメリカについては、幸吉が戦前より、ニューヨーク、パリ、ロンドンに支店を出していたため、もともとミキモトパールの誕生場所の認知度が高く、それほど割合は変わっていません。

しかし、一昨年、ミシュランの2つ星をいただいて、昨年、今年と、フランスのお客様が、毎年、倍々に激増しました。

—外国人観光客の対応はどのように行われているのですか？

昔から海外からのお客様がいらっしゃっているため、島内のサイン、展示パネルは、何十年前から、日本語、英語の両併記になっています。

それから、パンフレットは日本語を含めて10カ国語—英語、フランス語、ドイツ語、中国語、台湾語、スペイン語、イタリア語、韓国語、ポルトガル語—で島の概略はおわかりいただけるようになっています

また、海女の実演をご覧いただくときは、日本語でライブで海女の解説をしているのですが、海外の方も、別室で、その国の言葉をテープで流して、海女と真珠の関わりの説明を聞けるようにしています。

—本年は、御木本幸吉生誕150周年になりますが、記念事業はあるのでしょうか？

ミキモトというブランド名は知っていても、御木本幸吉という人物については知らない人が多くなってきたので、新たにWEB上で彼の生涯や功績を紹介するページをもうけています (<http://kokichi.mikimoto.com/>)。また、鳥羽市でも御木本幸吉生誕150周年記念事業実行委員会が立ち上げられ、記念式典や講演会などさまざまな記念事業が10月から展開されます。

世界の女性を真珠で輝かせることを夢見て真珠養殖に人生のすべてを注ぎこみ、日本を代表する産業にまで成長させた幸吉。生誕150年を迎える今年、明治、大正、昭和と激動の時代を駆け抜け、世界を舞台に活躍した人物が鳥羽にいたことをあ

らためて知っていただく機会になればと思っております。

—今後の抱負や、課題等についてお聞かせください。

時代によって、見せ方は変わっていくと思いますが、幸吉の意志、信念だけは連綿と受け継いでいきたいと考えています。

日本を代表する産業になった真珠の魅力をもっと多くの人に知っていただき、彼自身が愛してやまなかった伊勢志摩の自然を守る手伝いをし、また、未来を担う子供達が夢を持てるように伝えていく交流の場所であればと思っています、

また、海外からのお客様もますます増えてくると思いますので、そういった方々に、今以上の満足をしていただけるように、ハード、ソフトの整備をしなければと思います。



鳥羽駅前の御木本幸吉氏の銅像